

高齢者福祉施設でのターミナルケアにおける spiritual pain の軽減支援に関する研究

西口守（東京家政学院大学） 三浦虎彦（上智社会福祉専門学校） 朝倉和子（東京家政学院大学）

<要 旨>

利用者の重度化が進む中、高齢者施設におけるターミナルケアの展開も多くなってきたが、死とその過程に利用者と共に参画するターミナルケアは職員に重い課題を突き付けている。このような現状の中で、高齢者施設現場では、スピリチュアルケアがどの様に捉えられ、利用者が抱く精神的な痛みを施設職員がどの様に認識し、向き合っているのかを把握するため、アンケートによる量的調査と施設職員へのフォーカスグループインタビューによる質的調査を行った。

調査とインタビューから、スピリチュアルペイン軽減へのケアはまだ一般的ではないこと、利用者は自分らしさが失われること、環境の変化や家族等との別れ（死別も含む）に寂しさを感じており、それが精神的な痛みや混乱につながっている現状が明らかになった。また、スピリチュアルケアを自覚していなくても、実践している部分も多いこと、そして利用者に寄り添い、安心感が抱けるような支援が重要であることが明らかになった。

利用者は死の過程において、自身の生きてきた道のりや価値観、それを支えてきた家族への想いとまた家族の利用者への思い、また、相談員の思いや支援によって安堵を感じている。しかしその一方で、それらが利用者へ様々な揺らぎを起こす相互作用も理解できた。そして、その相互作用が利用者自身の生きてきたリアルな現実（人生）に本質的な問いを照射していることを示唆された。

<キーワード>

spiritual pain, 高齢者、老人福祉施設、量的調査、質的調査

【はじめに】

介護保険制度が10年経過し、政策的誘導もあり高齢者福祉施設、特に特別養護老人ホームにおいては、利用者の重度化が進みターミナルケアの展開もそう珍しいことではなくなってきた。死とその過程に利用者と共に参画するターミナルケアは、高齢者施設の職員に重い課題を突き付けている。それは今まで構築してきた言葉によるコミュニケーションでは、対話が困難な利用者-すなわち了解的な関係が構築できないが増大している

ことだ。たとえば経口で摂取できない利用者の意思が分からないので、『自動的』に鼻腔や胃瘻による栄養管理が行われたり、また重度認知症の利用者の暴言や暴力行為に対して、コミュニケーションを通して良い関係を図ることが困難になり、そこでは職員からの暴力行為が発生したり、逆に職員の不全感が退職行動を引き起こしたりする深刻な状況が続いている。

ところで人生の終末期に根源的な悩みや

痛みを持つことがある。それを *spiritual pain* とよぶが、この *spirituality* が世界的に注目を集めたのが 1998 年の世界保健機関の総会であった。この総会では健康の定義を従来の「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」を改めて「完全な肉体的、精神的、スピリチュアル及び社会的福祉のダイナミックな状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない」としたことによる。ここで国際的にスピリチュアリティということばが認知を受けることになったが、この健康の定義の見直しは、我が国を含む反対があったため可決されてはいない。スピリチュアリティということばは、極めて多義的な意味があり、それが「宗教と同一かそうではないかには明確な答えがない」¹⁾ としているが、いずれにしてもなんらかの宗教的な側面(特定の宗教ということではなく)が包含されていることは否定できないように思う。つまり人間存在を水平的に位置づけるのではなく垂直方向で理解しようとするときこのスピリチュアリティということばの本質的な理解があるのではないかと考える。窪寺は「・・・終末期患者は・・・人生の意味や未来を喪失した悲惨な状況におかれることになる。…今、生き方、死に方を懸命に考えざるを得なくなっている。このような・・・背景がスピリチュアリティへの熱い関心はある」²⁾ と述べる。

前述したようにこの文脈の中で *spiritual pain* は理解されるのだが、まさに特別養護老人ホームでターミナルを迎えるとき、この *spiritual pain* に直面している高齢者の存在

があり、それは様々に形を変えて表れるのだろう。このような状況の中で、死に直面する高齢者に向き合うソーシャルワーカーとしての生活相談員は、ターミナル期の高齢者の垂直的生命との関係で惹起される「痛み」すなわち *spiritual pain* についてどのように理解しているのだろうか。特にこの言葉が、まだ一般化されていない我が国において、存在そのもの揺らぎからくるこの痛みをどのように高齢者と共有しまた軽減のための支援をしようとしているのか、東日本大震災を経て、今、命のありようを深刻にそして真剣に問うとする我が国にとって、重い課題であり、また向き合うべき痛みでもある。

【視点・方法】

高齢者施設現場において、スピリチュアルケアがどのように捉えられ、利用者が抱く精神的な痛みを施設職員がどのように認識し、向き合っているのかを把握するため、アンケートによる量的調査と施設職員へのグループインタビューによる質的調査を行った。

アンケート調査の概要：調査期間、2011(平成23)年7月22日～8月12日。東京都及び神奈川県内の特別養護老人ホーム615施設への郵送調査。回答は生活相談員に依頼した。回収数は176、回収率は28.6%。調査項目は、①ターミナルケアの実施状況②スピリチュアルペイン軽減のためのケアの実施状況③施設内での葬儀や慰霊祭などの実施状況④スピリチュアルケアの担当者の有無⑤スピリチュアルペイン軽減のためのチームやカンファレンスの有無⑥スピリチュアルペインの具体的内容⑦

スピリチュアルペイン軽減のための実際の行為などを中心に聞いた。

インタビュー調査の概要：2012（平成 24）年 2 月 11 日、都内特別養護老人ホーム職員 8 名（所属施設はすべて異なる）におけるフォーカスグループインタビュー。時間は約 140 分程度。インタビューガイドを用いた半構造化インタビューを実施した。インタビューガイドは①死とその過程の哲学的、実際的な問題や課題に向き合う姿、②認知症の人々のスピリチュアルティの理解、③スピリチュアルペインへの具体的な軽減のための支援、④スピリチュアルペインといわゆるヒーリングセラピーの関係、の 4 つの項目を設定し、利用者の死への感じ方、認知症や対話困難の利用者が抱いているであろう不安への対応方法、スピリチュアルペインとヒーリングセラピーの関係性、さらに職員が感じている問題等を中心に聞いた。インタビューの結果は、逐語化し、質的コーディング法で分析を行った。

なおこのインタビューはフォーカスグループインタビュー法を採用した。フォーカスグループ法はクルト・レヴィン「場の理論」を基盤にしており次のような特徴がある

- (1) グループダイナミクスを応用した質的な情報把握の方法。
- (2) 複数の人間のダイナミックなかかわりに関する情報を集め、系統的に整理して新しい理論を構築。
- (3) 最大の特徴は、グループダイナミクスの応用により、単独インタビューでは得られない奥深くそして幅広い情報内容を引き出すことが可能な点。

をあげることができる。

【倫理的配慮】

アンケート調査、インタビュー双方において研究の目的や意義について文書や口頭にて説明し、調査協力による不利益を被らないこと、個人や施設が特定できないよう留意した。フォーカスグループインタビューでは記録やその権利等について承諾書を交した。

【結果】

「量的調査の結果」

アンケート（量的）調査については以下の通りである。

1) 施設でターミナルケアをどの程度実施しているか

何らかの形でターミナルケアを行っている（「少し行っている」、「かなり行っている」、「積極的に行っている」の合計）と答えた相談員は全体の7割強であった。一方、ほとんど行っていないと答えた相談員も、全体の2割弱に達していた。

2) スピリチュアルペイン（以下 SP と書く）軽減の支援をどのくらい行っているか。

「ターミナルケア」という表現ではなく、「スピリチュアルペインを軽減するための支援をどのくらい行っているか」を尋ねたところ、「ほとんど行っていない」と「あまり行っていない」のどちらかを回答した相談員が全体の半数以上となった。「とても積極的に行っている」と回答した相談員は1%程度である。

3) 慰霊祭等の利用者の追悼の催しを実施しているか

「実施している」と答えた相談員は全体のお

よそ4割であった。

4) スピリチュアルケア（以下 SC と書く）を行う職員が決まっているか

SC を行う職種が決まっていると答えた相談員は全体の1割以下であり、9割以上の施設では、そのような職種が決まっていない状況であることがわかる。

5) SCを行うチームが施設内にあるか

SCを行うチームの有無を尋ねたところ、9割以上の相談員は「ない」と回答した。

6) SCに関するカンファレンスの実施状況

SCに関するカンファレンスを行っているかどうかを尋ねたところ、8割以上の施設では実施されていなかった。

7) 利用者の SP には具体的にどのようなものがあるか

7) -1 生きながらえることがつらい

相談員からみて、「生きながらえること自体がつらい」と感じる SP があると思うかを五件法で尋ねた。およそ半数程度が「少しはあると思う」で最も多く、「かなりあると思う」と「非常にあると思う」を加えると、何らかの形であると思うと答えた相談員が、全体の8割強となる。

7) -2 自分らしさが失われていると感じる

相談員からみて、施設の利用者が自身の今の状態について「自分らしさが失われている」と感じているかどうかを尋ねたところ、7-1と同様の傾向があり、「少しはあると思う」が4割強と最も多く、「かなりあると思う」と「非常にあると思う」を合計すると8割強に達する。

7) -3 自分の障害や疾病をこれまでの人生の罰だと感じている

現在の自分の障害の状態や疾病があること

について、それを「これまでの人生の罰」だと感じているかどうかを尋ねた。7) -1や7) -2の分布とは異なり、「ないと思う」の側に偏った形状となった。「ほとんどないと思う」と「あまりないと思う」を加えると半数を超える。

7) -4 施設で生活していること自体を人生の罰だと感じる。

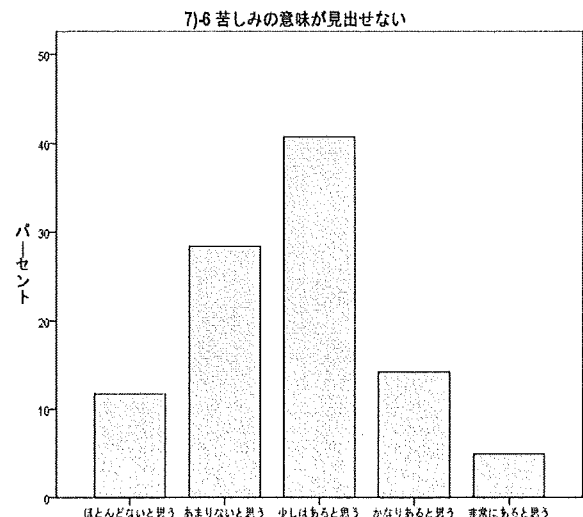
7) -3と類似する質問であるが、「施設で生活していること自体を」人生の罰だと感じているかどうかを尋ねた。その結果、やはり「ほとんどないと思う」と「あまりないと思う」の合計が6割を超えた。

7) -5 自分の人生に対して後悔の気持ちをもっている

7) -5では、SPの中でも「自分の人生に対して後悔の気持ちを持っている」という内容がどの程度あると思うかを尋ねた。「少しはあると思う」が4割と最も多く「あまりないと思う」もそれについて4割弱であり、これらの合計で8割を占めた。

7) -6 苦しみの意味が見いだせない

現在、利用者自身が何らかの形で感じている苦しみについて、そのことの意味が見いだせないというSPがどの程度あるのかを尋ねた。その



結果、分布としては、上記の項目に比べて正規分布に近い形状となった。「少しはあると思う」が最も多くて4割弱、次いで「あまりないと思う」が3割弱である。

7) -7 死後の命を信じることができない

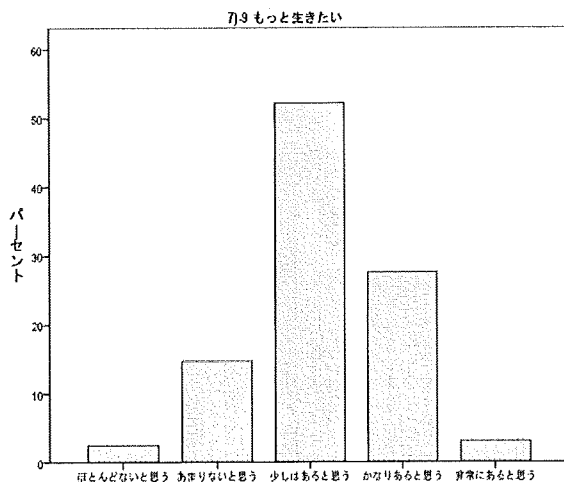
利用者が自らの死後、何等かの形で「死後の命」を信じることができかどうかについての質問項目である。「信じることができない」というSPがどの程度あるのかを尋ねた結果、「あまりないと思う」が4割を超えて最も多く、次いで「少しはあると思う」が3割強、合計すると全体の8割弱に達する。

7) -8 家族や大切な人との別れが辛い

家族または大切な人との別れをれつらく感じることに、どの程度あると思うかを尋ねたところ、「かなりあると思う」がほぼ4割と最も多くなっていた。次いで「少しはあると思う」が3割強、これに「非常にあると思う」を加えると、全体のおよそ9割に達する。

7) -9 もっと生きたいと感じている

利用者が、高齢期に施設で生活する中で、「もっと生きていたい」と感じており、SPとしてそのような痛みがあるかを尋ねた質問項



目である。その結果、「少しはあると思う」の中央値が5割を超えて突出している。次いで、多いのは「かなりあると思う」であるが、3割弱に留まった。

8) SP軽減のための行為の有無

8) -1 身体的苦痛を最小限にする

SPを軽減する上でも身体的な側面にまずは注目し、その苦痛を最小限にするための介護上の工夫をどの程度行っているかを尋ねた。最も多いのは「かなり行っている」でほぼ半数を占めた。「少しは行っている」と「非常によく行っている」を加えると全体の95%に達している。特別養護老人ホームとして提供できる基本的なSP軽減のための行為の一つが「身体的苦痛を最小限にする」ことであると考えられる。

8) -2 利用者の思いや希望を聞く

SP軽減のための行為として「利用者の思いや希望を聞く」ことについてどの程度行っていると思うかを尋ねた。その結果、「かなり行っている」が6割を超え、多くの施設における基本的なSP軽減のための行為として「利用者の思いや希望を聞く」対応がなされていることが示唆されていた。

8) -3 利用者のそばに居る（寄り添う）

職員が能動的に何かを働きかけるのではなく、利用者の傍に居る、寄り添うという行為をとることでSPを軽減しているかどうかについて尋ねた。ほとんど行っていないと回答した相談員はおらず、「かなり行っている」が半数程度、「少しは行っている」が3割程度と、多くの施設で「寄り添う」ケアが行われている状況であった。

8) -4 利用者と一緒に美しいものを見たり

聞いたりする

「寄り添う」行為の別な形として、利用者と共に何かを見たり聞いたりすることを質問した。この項目も「ほとんど行っていない」と回答した相談員はゼロであり、「少しは行っている」が5割弱、次いで「かなり行っている」が3割強となっている。頻度はともかくとして、何らかの形でこうした行為を行っている現状が読み取れる。

8) -5 大切な人と過ごせる時間をつくる

職員が主体となるのではなく、利用者にとって「大切な人」と共に過ごせるように施設が対応することをどの程度行っているかを質問した。その結果、「少しは行っている」と「かなり行っているが」40.4%で同数となった。多くの施設で、何らかの形でこのような対応を行っていると考えられる。

8) -6 人生観、宗教観、死生観などを利用者と話し合う

この質問項目は、物理的な支援ではなく、終末期における人生のとらえ方を利用者と共に共有しようとする行為であり、言語を用いて利用者とは話をすることを想定している。結果としては、「あまり行っていない」が最も多く4割弱に達している。他の項目と比較すると「あまり行っていない」と「ほとんど行っていない」を合わせて6割以上となり、このような行為を介護施設で日常的に職員が行う傾向は少ないことが伺える。

8) -7 利用者が先祖の供養（墓参りなど）をするのを手伝う

墓参りなどの先祖の供養に対し、施設職員のサポートがどの程度あるのかを尋ねたところ、「ほとんど行っていない」が最も多く35.5%で

あった。27%台の「あまり行っていない」を加えると全体の6割に達する。他の項目と比較して、先祖の供養に職員が配慮したり介入したりすることは、あまり行われたい傾向にあると考えられる。

「質的調査結果」

1. 調査の分析方法

調査協力者は表 1 の通りである。

(表 1インタビュー協力者の属性)

氏名	性別	年齢	勤務年数	相談員としての勤務年数
A	男	40歳代	17年	7年
B	男	30歳代	12年	2年
C	男	30歳代	11年	10年
D	男	30歳代	9年	9年
E	女	30歳代	10年	6年
F	女	30歳代	8年	5年
G	女	30歳代	14年	1年
H	女	30歳代	7年	5年

分析の手順は、インタビューを逐語化し、そのデータを3人の研究者が何度も読み直した。今回採用した分析方法は佐藤郁哉³⁾のたたき上げ式コーディングである。

この他にGiorggi^{4) 5)}、Watoson⁶⁾らの手法も参考にした。

佐藤の多分析手法は、①データの秩序付け、②データの読み直し、③データの切片化、④オープンコーディングといわれる見出し化、⑤コードの比較、⑥カテゴリー（最終的にはサブカテゴリー）の生成、⑦カテゴリー間の探索検討、⑧検討結果、⑥のカテゴリーをサブカテゴリー

とし、⑦さらにサブカテゴリーの探索検討を経てカテゴリーを生成した。

参考にした Giorggi⁴⁾⁵⁾、Watoson⁶⁾の手法は、①データの読み返し、②小さな意味ある単位の抽出、などを基本としている。

2. 結果

この中で、今回はインタビューガイド4のうち以下の3すなわち(1)死とその過程の哲学的、実際的な問題や課題に向き合う姿、(2)認知症の人々の spirituality の理解、(3) spiritual pain への具体的な軽減のための支援について述べる。

2-1 課題のサブコーディング

1) 死とその過程の哲学的、実際的な問題や課題に向き合う姿では①相談員の対話の困惑・困難②利用者の死への受け止め方の揺らぎ③利用者の生きながらえる辛さ④相談員の支援の方法⑤利用者の状況による死の受けとめ方の多様⑥家族の存在⑦利用者の職員への要望⑧死に直面する寂しさ⑨死への準備というサブカテゴリーが抽出された。

2) 認知症の人々の spirituality の理解では、①相談員の支援の哲学・理念②相談員の支援の方法・関わり方・テクニック③利用者が認知症の進行に伴って忘れていく④生活歴や家族への思いが影響を与える認知症の怒り⑤死に顔が語る利用者の全う感⑥職員の後悔がサブカテゴリーとして抽出された。

3) spiritual pain への具体的な軽減のための支援では、①利用者にとって寂しくない環境づくり②施設における利用者への宗教的行事支援③施設における spiritual pain やタクティールケアのとらえ方と実践④利用者を看

取ることに対する職員の不安と対応⑤死への準備をする利用者とそれに応える家族の思いがサブカテゴリーとして抽出された。

2-2 カテゴリーの抽出

サブカテゴリー間の関係を検討しつつ以下のカテゴリーを抽出した。

①相談員の哲学・思い、②相談員の支援の方法、③利用者の死に対する不安と希望また超越、④家族の思い、痛みがそれぞれ抽出された。

【考察】

1 総括として

ターミナル期、すなわち人生の終焉を迎える時期には様々な思いが現れる。またそれは、一人の器の中では溢れんばかりの量であると共に質的にも重い課題である。こういうなかで特別養護老人ホームに暮らす利用者は、ある時は淡々とあるときは悶え苦しみ、またあるときには死への希望を抱くための人生のリセット行動をしているかのような姿を本研究から垣間見た。すなわち、死とその歩みは人間にとって何かを問わずにはおかない、またそれに応えなければならないまさに聖なる時期なのだ。

2 量的調査からの考察

2-1 利用者は死と向きあいながら本質的な問いを続けている

「生きながらえることがつらい」と感じる利用者は8割を超え、「自分らしさが失われている」と感じる利用者も8割を超えている。また「自分の人生への後悔」についてもあると思われる利用者は8割を超えている。

このようなことから利用者は、死に向き合い

ながら、自分が失われていく葛藤、生きてきたことの後悔、やり残したことへの哀しみ、やってしまったことへの重荷、そして今生きながらえてしまっていることの重い辛さが絶えず横たわっていると考えてもいいだろう。

2-2 その反対にもっと生きたいという希望

「利用者が、高齢期に施設で生活する中で、「もっと生きていたい」と感じるものが「少しはあると思う」の中央値が5割を超えて突出している。次いで、多いのは「かなりあると思う」であるが、3割弱に留まった。」

利用者は生きながらえていること自体が苦しいと感じている反面、「もっと生きていたい」とも感じている。これをどのように理解すればよいのだろうか。ここにはある種の矛盾があるが、こういう矛盾こそが人生そのものであり、また終末期特有の感情ではないのだろうか。永らえたくないが、生きてもみたいという、思いが人間の本質であり、それが終末期にデフォルメされるのではないだろうか。

2-3 スピリチュアルペイン軽減の方法はコミュニケーション

スピリチュアルペイン軽減の方法を尋ねると、いわゆる宗教的な方法への肯定は相対的に少なく、①身体的苦痛を和らげる、②利用者の思い、希望を聞く、③そばに寄り添う、④美しいものを見たりするなどが高く、①死生観を語る、②先祖の墓参りに行くなどは相対的に少なかった。これらから、現場において、スピリチュアルペインを軽減するためには、様々な方法でのコミュニケーションが重要であることが示唆された。

2-4 まとめ

窪寺は「不安、恐怖、孤独、虚無感を、ただ黙って心を傾けて聴き続けてもらうことの中に超越的存在の姿を見る・・・自分を受け止めてくれることを実感しながら少しずつ否定的な感情が減少し前向きな感情・肯定的な感情が芽生える」⁷⁾と述べるが終末期に惹起される本質的な人生の痛みに向き合う我々にはまさに普段のコミュニケーションの質を高めることが重要であろう。

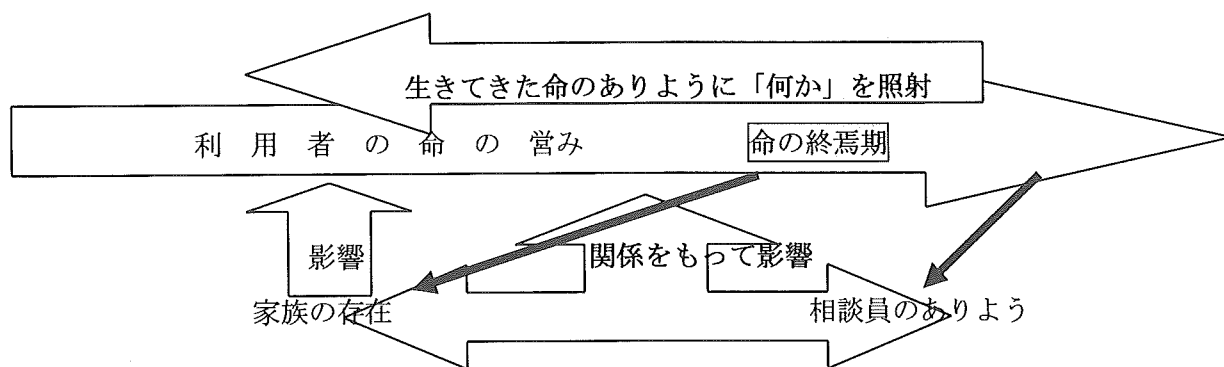
3 質的調査から

3-1 命の終焉期に起きる様々な相互作用

カテゴリーには、①相談員の哲学・思い、②相談員の支援の方法、③利用者の死に対する不安と希望また超越 ④家族の思い、痛みがそれぞれ抽出された。

これらから、利用者が向き合う死の過程は、利用者自身の生きてきたその道のりの歩み方そしてその価値観、それを支えた家族への思いと利用者への家族の思いが、死という究極的なギリギリの状況の中で交わる相談員の思いや哲学、支援に触媒されながら安堵する。しかし、その反対にそのことがまた新しい揺らぎを引き起こす相互の関係を通じて、利用者自身が生きてきた命のありようそのものにも「何か」を照射することが現場で生成されていることが示唆された。これを次のように図式化する。

(図1 命の終焉期に起きる様々な相互作用)



3-2 向き合う必要性

利用者は死を目前として様々な否定的な感情を露わにする。それは否定的というより悶々とした苦しみ悲しみの表出であるが、そこに向き合えず「お茶を濁したり」「ごまかしたりする」という相談員のありようも明らかになった。もちろん相談員がいうように末期や認知症の方々の支援は、言葉による了解性がなかなか取れないことから生じる精神的な重圧があるのは確かだが、それを理解しつつ、その向き合い方を今一度見直す必要があることをこの利用者の行動は問うている。

3-3 終わりに

義平は「人がこの世での旅路を終えて、死への旅立ち始めようとするとき、様々なペインと向き合わなければならないほど、このペインを経験しなければ旅立てないほどの重要でまた聖なる霊的なシーンであることを我々は認識したい。涙を流されたり笑ったり、あるときには憤りを表したりして話をされる。ひたむきにいきてこられた一人ひとりの人生というのは、それ自体で尊いのだという思いに深く駆られる。受容できたか、できなかったかではなく、

与えられた人生を生きたということ自体が尊いということなのだ。」⁸⁾と述べるが、尊い与えられた人生を締めくくるときの我々の向き合い方はその閉じる主体の利用者から学ぶ必要がある。

【文献】

- 1) 松島公望 「日本人高齢者における宗教性およびスピリチュアリティに関する実証的研究の可能性」老年社会科学 第31巻第4号 p p 509-512 日本老年社会科学会 2010年
- 2) 窪寺俊之 「スピリチュアルケア概説」 p 5 三輪書店 2008年
- 3) 佐藤郁哉 「質的データ分析法 原理・方法・実践」 新曜社 2008年
- 4) Giorgi A: A Phenomenological Perspective on Certain Qualitative Research Methods. *Jornal of Phenomenological Psychology*, 25(2):PP190-220(1994)
- 5) Giogi A: 経験記述分析の実際：現象的心理学の『理論と実践』（吉田章宏訳）看護研究、37(7)：p p 63-75 (2004)
- 6) Watson J: ワトソン看護論：人間科学とヒューマンケア、(稲岡文昭、稲岡光子訳) p p 113-138

医学書院 1992年

7) 窪寺俊之 前掲書 p70

8) 窪寺俊之・平林孝祐編「続・スピリチュアルケアを語る—医療・看護・介護・福祉への視点」所蔵、義平雅夫「スピリチュアルケアとチャプレンの働き—宗教性・超越性に着目して」
p118

関西学院大学出版会 2009年